

清沢満之の心理学講義及び試稿について

鈴木 朋子

(お茶の水女子大学大学院)

はじめに

清沢満之（1863-1903）は、病のため休養をとることになった井上円了（1858-1919）に代わり、1887年（明治20）、哲学館にて心理学（応用）の講義を行っている。井上は後に、妖怪学を講じているが、その意図は世間に横行している迷信現象を一掃することにあった。近代化の波を受けつつも、民衆の間に依然として根強く残っている迷妄なる信を払拭すること、それはまた心理学講義の開講目的でもあったと考えられる。

清沢の心理学講義に関する先行研究においては、井上の意志を清沢が引き受け「我々の錯誤的心性の変象と迷妄的信の在り方に警鐘を打ち鳴らそうとした」⁽¹⁾ ことが、講義録の内容から論証されている。一方、本稿では、清沢の心理学講義において、先行研究による指摘とは異なる側面があることを、明らかにしたいと考える。結論を先取りしてしまうと、近代科学の還元主義に対する清沢の懐疑的な態度が、この講義内容に示唆されているのである。つまり、当時の清沢において、怪奇現象など非科学的な現象に対する迷信は肯定され得ないものでありつつ、科学的知見を万能だとみなすこともまた、肯定されていないのである。

なお、本稿では、より詳細な考察を目指すため、心理学講義の 2,3 年後に書かれた心理学試稿も含めて検討する。

1. 感覚

清沢によると、心理学とは、認識あるいは識知とも称される人間の精神作用について研究するものとされている。精神作用は、心の作用、心の現象、意識作用、心性作用とも換言され、知情意という三つの要素で構成される。つまり、清沢において、人間のなす認識という営みは、知力と感情と意志とが相互に関係しあいなされる作用であると、理解されているのである。講義録及び試稿に共通して論じられているのは、この三要素の一つである知力の変象、すなわち知力という心の現象の変化についてである。知力は、感覚・知覚・思想の三つに分類されているが、本章ではまず感覚変象に関する記述について検討する。

感覚には、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚・有機感覚の六つがある。そして、感覚変象が生じる要因として、みずからの外における事情（中間物と相対物）と、みずからの内における事情（身体及び神経系と感覚以外の精神作用）があると清沢は述べ、各々の感覚について具体例を挙げ説明している。視覚の場合、中間物による変象とは、着色されたガラスや顕微鏡を通して事物を見たときに生じるものである。また、相対物による変象とは、暗室から屋外へ出たときに通常より明るく感じたり、平行線に複数の斜線を入れると、その幅が異なって見える場合などである。身体及び神経系による変象は、色盲などがその例であり、感覚以外の精神作用による変象には、恐怖感をもたらす幻覚がある。

このように、清沢は感覚変象の生じる多くの例を挙げ、我々によって感覚されたものか
いかに一定不変ではないかを論じている。それは、怪奇現象といわれる出来事が、何らか
の原因によって生じる感覚変象に過ぎないこと、すなわち感覚されたものが事実ではな
いことを明らかにするものである。とはいえ、感覚されたものが実在しない場合があるなら
ば、反対に、感覚されないものが実在している可能性も否定できないことになる。つまり、
清沢は、人間の感覚機能によっては感知し得ない事実があることを、認めているのである。

例えば、超音波などがそれに該当するであろう。しかしながら、機械を用いて事物を観
察・測定するという、科学の研究方法によって認められた事実もまた、暫定的な真理に過
ぎないと清沢は解しているのである。彼は、視覚変象を生じさせる要因の一つが、中間物
であると述べていた。そして、その一例として挙げられているのが、顕微鏡である。顕微
鏡は中間物であるから、それがいかなるものかによって、つまり顕微鏡の性能いかによ
って視覚は変象する。現在使用されている顕微鏡において視覚され、真理であると認めら
れたものも、将来さらに高性能な顕微鏡が開発された際には、真理ではなくなってしまう
のである。

また、感覚変象について述べるにあたり、清沢はまず「此般の所説は平常普通の見解に
より、外界に事物あり、其事物に青黄長短等の性質あり、として論ずる者と知るへし」(3
巻、192 ページ)⁽²⁾と断った上で、講義を進めている。ここでは仮に、自己の外部に何ら
かの性質を有しているものが存在している、という「平常普通の見解」に基づいて述べる
のだというのである。

ところで 科学における真理追究の方法は、自己と自己以外のものとを分離した存在で
あると看做すことによって、対象を客観的に観察しようとするものであり、この「平常普
通の見解」に基づくものであるといえる。一方、清沢は、1892 年(明治 25)刊行の『宗
教哲学骸骨』以来、晩年に至るまで、一貫して万物一体という存在論を説いている。それ
は、無限という唯一の存在の内に万物を捉えるという、全体論の立場をとるものであり、
自己と自己以外のものとの切り離しを前提とする科学の立場とは、異なるものである。し
たがって、先に挙げた発言から、科学とは異なる認識方法があることを、当時の清沢が了
解しており、それが後に万物一体論として展開されていったと考えることができよう。

2. 知覚

知力を構成する二つ目の要素である知覚とは、種々の感覚を材料とし、これに分別を加
えるものであり、感覚を解得する作用であると定義されている。また、知覚は、自他内外
の分別を立て、感覚を与えるものが外界の事物であると認識することでもある。我々は、
黄・円形といった視覚から、直接それが橙であると知るのではない。これらの視覚が自己
の外から与えられたものであると認識し、黄と円形という視覚を結合して解得作用を施し
た結果、それが橙であると知るのである。

そして、感覚と同様、知覚もまた変象を生じるものであり、その原因とされているのが、
専制感情及び専制思想である。前者は、知覚する主体があらかじめ有している情であり、
清沢が特に注目しているのは、恐怖や畏懼である。後者は、この場合主として、再現・想
像という作用を指すものと思われる。清沢は、専制感情がまず思想に影響を与え、その結
果、知覚変象が生じると述べている。

例えば、恐怖という情に制され、暗闇を歩いているとき、黒い色、細長い形を視覚した
としよう。すると、知覚の主体である人物の心には、それらの視覚から蛇という生物が再

現され、足元にある物体を蛇であると知覚する。しかし、実際にはそれが蛇ではなく、紐であったというような場合が、専制感情による専制思想への影響の結果、知覚変象が生じる例である。清沢は、世間でいわれる怪談の多くは、こうした専制感情による知覚変象であるという。

また、清沢によると、知覚という解得作用は、経験に基づく判断とも換言され、「再現の元素の加はる処には、各個人の経験の異なるに依りて再現の異なることを待たざるべし」(3巻、234 ページ)ともいわれている。我々は、複数の感覚を結合し、これまで経験してきたものを再現することで、対象を知覚する。しかし、その経験は各人によって異なるものである以上、同一の対象を感覚しても、その知覚が同一のものになるとは限らない。

つまり、再現による知覚は、あくまで経験の範囲に限られ、経験を超えた再現不可能なものに出会った場合、それは再現ではなく想像によって知覚されるのである。換言すれば、これまで経験されていない新たな事象の知覚とは、我々の想像によるのである。知覚に対する清沢のこうした見解は、科学とは空想の上に立つものである⁽³⁾という、後年に述べられた主張と連続性を持っている。

3. 概念・判断

再現・想像は、思想の一つである実想の内に分類されているが、思想にはまた、概念・判断・推理という虚想がある。このうち、概念と判断についての論述が、心理学試稿に残されている。

先に述べたように、科学は自己と自己以外のものとの分離に基づくものであるが、清沢がそれを了解していたことは、概念の構成に関する論述にも、うかがうことができる。概念とは、複数の事象を比較し、そこから抽出された同点に基づき、一類を形成するという、概括観念である。また、概念には、外延と内包があるとされている。外延とは、ある概念に含まれる複数の範囲のことであり、例えば、花という概念の外延には、桜・梅・菊などがある。一方、内包とは、概念が具している性質であり、花の場合でいえば、形・色・香などである。

外延は経験に、内包は知識によって増加し、概念は発展する。つまり、経験と知識が増加するに従い、ある概念の内実はより拡大されていくのである。ここで清沢は、知識による内包増加の例として、水という概念をとりあげている。従来認められていた透明、流動といった性質に、化学のもたらす知識の増加によって、水素と酸素から生じるという性質が加えられたというのである。

化学は自然科学の一分野であるゆえ、この叙述は、科学による知識の増加が、概念を拡大する一つの例であるといえる。それはまた、科学による知識の増加によって、概念の内実がより厳密に細分化されていくことを意味している。科学は、自己から切り離されたものをさらに何らかの基準によって分離するという、細分化の積み重ねによって、事物の正確な姿を知ろうとする還元主義の立場に立っている。したがって、化学が概念の発展をもたらすという発言は、概念の細分化、還元化が科学による真理追究の方法であると清沢が理解していたことを、示すものであるということが出来る。

また、判断については、二つの観念を比較し⁽⁴⁾、その同異を認定する作用であると定義され、認定できかねる場合を疑惑と呼ぶという。二つの観念を比較した際、ある場合にはそれらが同となり、また別の場合には異となるというように、同異の判定が一定しないことが、疑惑となるのである。それは、経験の増加により、一つの命題をより多くの状況下

に照らして判断することになるため、生じるものと考えられる。また、知識の増加により、一つの観念がより多くの観念と比較されることにも、起因しているといえよう。

清沢は、幼児や無教育者ほど疑惑が少ないと述べている。分離を重ね比較を重ねるといふ科学に代表される学問の進歩、知識の拡大は、我々に新たな疑惑を生じさせるのである。そして、この疑惑の追及は、どこまでいっても尽きることがない。それが学問の持つ性格であることは、『宗教哲学骸骨』の第一章にも論じられている。清沢は、東京大学において当時最先端の学問を修めたエリートであるが、人間の知力の有限性を深く認識しており、それを過信することの危険性に気付いていたのである。

おわりに

世間において事実であると信じられている不可思議奇怪な現象の大半は、感覚や知覚の変象によるものであることを、清沢は心理学講義によって論じた。その反面、科学によって認められた事実のみを絶対の真理とすることにも、懐疑的なまなざしが向けられていた。それは、明治 30 年代に執筆される科学万能主義に対する批判、全体論の主張へと通じるものであり、清沢の思想の一貫性がそこに表れているといえる。

ところで、科学における真理追究の前提となっているものは、自他の切り離しであり、それが西洋近代における自我の確立であることは、よく知られている。また、人間と人間以外のものとの間に境界線を引き、自然を客観的に観察するという科学の方法は、人間のみが神と同じ理性を持つとするキリスト教に由来するものであることも、指摘されている。一方、共同体の維持・繁栄が重視され、キリスト教の伝統を持たない日本においては、古来、全体論的志向を持つ思想が多岐にわたって展開されている、という特徴を持つ。

科学の発展が、人類に多くの恩恵と共に多くの弊害をもたらしたことは、周知の事実である。それは、還元主義という考え方が行き詰まりをみせていることを示すものであると捉え、この現状を打破するために、全体論的な理論が持ち出されることがある。全体論という考え方は日本固有のものではないが、全体論的色調の強い日本思想を研究することは、伝統を異とする西洋人に対してのみならず、時代が下るにつれ、全体より個を、超越者の力より科学の力を重んじるようになった我々日本人にとっても、今後進むべき方向を模索する一つの手掛かりとなるのではないだろうか。

註

- (1) 樋口章信「変象する心性の観察—清沢満之における『応用心理学』開講の意味—」(『親鸞教学』73号、1999年、29ページ) なお、管見では、清沢の心理学講義に関する先行研究はこの論文のみである。
- (2) 本文中の引用は、すべて『清沢満之全集』(全9巻、大谷大学編集、岩波書店、2002年～2003年)による。本文中には括弧内に巻数とページ数を記す。引用文の片仮名は平仮名に、旧漢字は新漢字に改め、句読点をつけ、傍線、ルビはすべてはしした。
- (3) 「正信と迷信」(『清沢満之全集』第6巻、189ページ参照)
- (4) 原文では「一個の観念を一個の概念と比較して」(第3巻、241ページ)とあるが、続く文章には「概念」の語がみられず「主賓二辞は比較さるべき観念」「一観念と他観念」などと表現されていることから、本稿においては「概念」を「観念」の誤植であると判断した。